ることだに叶はぬ處なり。是處よりは志ざす都の方も見られ、また都人の誰れ彼れをも見ることを得たり。げにや此の土地は天つ國境ひのことなれば、輝やける者等も斷えず往來せることなり。又此の國にては新郎は新婦との約束新たに爲らるゝことにて、かの『新郎の新婦を悅こぶ如く、汝の神汝を喜こび給ふべし』、と云はれたる處なり。また此の道中にて無くて叶はぬ物皆な是處に充ち足らひたれば、兩人は飲み食ひに乏しきを覺えず、猶ほ『汝らシオンの女に云へ、視よ汝の救來る、視よ主の御手に其の恩賜あり、勤勞の價は其の前にあり』、と朗らかに呼ばゝる聲都の方より聞こえ渡り、また所の人々等よりは、『聖き民、また神に贖なはれたる者』、などの名をも て呼び稱やされたり。

さる程に兩人は此の國に入り來りてより、今までになき喜悅を覺え、猶ほ愈よ近くに連れて、都の有樣も殘る方なく眺め得たり、

日雅歌五ノ八、

先づ眞珠と寶石もて疊み上げ、町々とても黃金をもて布き渡したるに、其の麗はしさ云はん方なく、況して日の光り之れに映じて榮光を添へたるなど、基督信者は一と目見て慕はしさの餘り忽ち眩暈を催ふし、また有望も同樣の氣味にて堪へ難ければ、暫し道の傍らに横たはりて、苦し紛れに聲を放ち、『もし我が愛する者に逢はゞ、我れ愛に依りて疾み煩らふと告げよ』、と叫びたり。

稍やありて兩人も聊さか元氣づきければ、また勵みを爲して進みけるに、愈よ都近くなるにつれて、麗はしき菓物園あり葡萄園あり、また百花園ありて其の入口悉皆く此の街道に向ひて開らけたり。さて兩人は此處を通る程に、一人の園丁の道の邊りに立てるに遇ひけり、されば之れに會釋して、「斯く麗はしき花園や葡萄園は、抑も誰れ人の所有なるべき」、と問へば彼の者答へて、「之れこそ我が大君の有にて、自からをも喜こばせ、また旅人をも樂しませんとて是處に

植ゑ置かるゝ者なれ」、と云ふ。斯くて園丁は彼の兩人を葡萄園に案内し、其の味良き物を取りて馳走を爲し、また大君の遊歩場や、また休憩ひ給ふべき種々の小亭などを示してけり。されば兩人は是處に打ち寛ろぎて、心置きなく眠りたり。

さて我れ夢の中に見てあれば、彼の兩人は眠りながらも左も面白げに打ち語るさま、今までの道中にても見受けしことなき程なるに、我れ之れを訝かしみて在りければ、彼の園丁やがて我れに向ひて、

「げにや、『その味はひの麗はしかる、眠れる者の口唇をも動かして之れに物云はしむ』、とある如く、之れ全く是處なる葡萄の味良き故なり」、と云へり。

（雅歌七ノ九、）

（詩篇二十一ノ十八、）

さる程に、兩人は頓て起き出でゝ身支度し、再び都に急がんとせり、されど前にも云へる如く、（元より此の都は純金なれば）、日の光り之れに映じて輝やけるさま極はめて華やかなるに、中々面を向けんやうも爲く、唯だ僅かに日遮の器を藉りて見る斗りなり。かくて愈よ進む程に兩個の人に出で遇ひしが、其の衣は黄金の如くに輝やき、其の顔は亦日光の如くに輝やきたり。

此の人々彼の旅人等に向ひ、那方よりか來りぬると尋ぬるに、兩人は其の由を告ぐ。彼の人々また尋ねて、何處に宿り、道中にては如何なる艱難や危險や、また慰藉や喜樂やに遇ひたるなど云へば、兩人は亦其の由をも細やかに打ち語る。其時彼の人々言葉を繼ぎて、

「さては卿等今猶ほ二たつの大事に會はるべく、其の上にて愈よ都には達するなれ」、と云へり。

されば基督信者と其の同伴は此の人々に連れ立ち呉れんことを求めけるに、彼の人々も然かすべしと諾がひしが、「さるにても之れに達するには卿等自身の信仰に依るべき筈なり」、と云へり。斯くて打ち連れて行く程に頓て城門の見ゆる處に着きてけり。

さて我れ猶ほ見けるに、彼の城門と此方の間に一とつの河あり、實に之れや此の死の川なるべくと覺しくて、掛け渡したる橋とても無く、而も其の水最と深かり、されば兩人は此の河の有樣を見て、忽ち甚く困じ果てしが、其時彼の人々傍はらより之れに向ひ、「卿等は是非とも之れを渡るべし、左なくば彼の城門に達せんこと叶ふまじ」、と云ふ。

旅人等は之れを聞きて、「あはれ此の外には道も無きものにや」、と尋ぬれば、彼の人々之れに答へて、「されば、無しとにも非ず、されど世の基の置かれし以來、許されて是れを通りし者は唯だ二人にて、乃はちエノクとエリヤとのみなり。實に終りの笏の鳴らん日までは、其の他誰れとて其の途を通ほる者もあらざるべし」、と云ふ。其時兩人の落膽一と方ならず、別けても基督信者は甚く憂れひて、彼途此途と眺め居りしが、絶えて此の河を遁るべき途の見らるべくも在ら

死の波凄く逆巻く時にも、希望の光り天の道を照らす

さるに「総じて水は那れの所も深かるべきか」、と問へば、「いや、そは何とも言ひ難し、實にや」、と云ひさして彼の人々言葉を繼ぎ、「卿等の我が大君に依り頼む信仰の程につれて、深さ浅さもあることなるべし」、と答へたり。

さるからに、兩人は愈よ支度して之れに入りしが、基督信者は看る看る溺れんと爲始めけるに、大聲を揚げて其の同伴なる有望を呼び、『あゝ我れ深みに落ち入る、巨波我が頭の上を越え、主の波ごとごとく我が上を越え行くなり』、と叫びてけり。

其時有望は之れを勵まし、「兄弟よ、心を確かに爲られよ、然のみ案ずることかは、我身は川底に足の觸るゝを覺ゆるなり」、と云ふに、基督信者は猶ほ叫びて、「あはれ友よ、死の憂苦我身を圍みたれば、我れは最早や乳と蜜の滴たる國を見ざるべし」、と云ふ。かくて暗黒と恐怖其の上に掩ひ懸りて、基督信者は一歩前も見ることを叶はず、

詩四十二ノ七、全六十九ノ二、

出埃及三ノ八、

死の波凄く逼迫く時にも、希望の光り天の道を照らす

ざるに「總じて水は那れの所も深かるべきか」、と問へば、「いや。それは何とも言ひ難し、實にや」、と云ひさして彼の人々言葉を繼ぎ、「卿等の我が大君に依り頼む信仰の程につれて、深さ淺さもあることなるべし」、と答へたり。

詩四十二ノ七、全六十九ノ二、

さるからに、兩人は愈よ支度して之れに入りしが、基督信者は看る看る溺れんと爲始めけるに、大聲を揚げて其の同伴なる有望を呼び、『あゝ我れ深みに落ち入る、巨波我が頭の上を越え、主の波ごとく我が上を越え行くなり』、と叫びてけり。

出埃及記三ノ八、

其時有望は之れを勵まし、「兄弟よ、心を確かに爲られよ、然のみ案ずることかは、我身は川底に足の觸るゝを覺ゆるなり」、と云ふに、基督信者は猶ほ叫びて、「あはれ友よ、死の憂苦我身を圍みたれば、我れは最早や乳と蜜の滴たる國を見ざるべし」、と云ふ。かくて暗黑と恐怖其の上に掩ひ懸りて、基督信者は一歩前も見ること叶はず、

且つ最ど其の氣も遠くなりて、其れが爲め越し方の道中にて見聞せし事の中にても、斯かる折に元氣を興ふる如き事などは皆な打ち忘れ、却つて心の恐怖ともなり又は此の河にて死ぬべき事や、到底も天國には行き得まじなど、心痛き事のみたわいも無く口走れり。また其の旅立ちし前や、愈よ旅立ちて後などにも犯したる罪過を思ひ案じて如何にも心配げに見受けられたり。且つ亦其の絶えず云ひ罵しる言葉より察すれば、定めし幽靈や惡鬼などの幻影にも迫め惱まされし者と見えたり。

然れば有望は是處に云はん方なき骨折を爲し、其の同伴の頭を沈めまじと努めしが、猶ほ數多度び打ち沈み、また浮き上りする程に、今は早や片息ならん斗りとなれり、有望は猶ほしも力を盡して之れを慰さめ、「兄弟よ、我身は彼の城門をも見、また人々の我等を迎へんとて立てるをも見るなり」、と云へば基督信者は斯かる中にも首を振り、「いや、それこそ、それこそ卿を迎へんとてなれ、實に卿の有望かるは我が能く知るところなるに」、と云ふ。「去かし卿とても同樣ならずや」。「あはれ兄弟よ、我身もし義しかりせば、主は必らず立ちて我れを助け給ふべし、されど我が罪惡ゆゑに我を見棄て、斯く此の禍ひに落しめ給ふなり」。其時有望は聲を勵まし、「兄弟よ、卿は何とて敎の言葉を忘れらるゝぞや、さても『彼等は死ぬるに苦しみ無く、其の力は却つて固し、彼等は人の如く憂ひに居らず、また人の如く患難に遇ふことなし』、とあるは惡人を指して云へることなり。されば卿が此の波間にて斯かる憂き苦しみを受けらるゝことも、神が卿を捨て給へる徵には非ず、却つて之れ其の送り給ふ者なるべく、之れに依りて卿の心に今まで受けたる其の恩惠を思ひ起させ、又患苦の中にも神に依りて生くることを得しめん爲めなるべし」、と云ふ。

詩七十三ノ四、五

さる程に我れ夢の中に見けるに、基督信者は暫し默然として在り

㊀以賽亞四十三ノ二、

ければ、有望は之れに向ひて更に言葉を添へ、「イエス、キリスト卿を救ひ給へば安心せられよ」、と云ふ。基督信者は之れを聞くと齊しく忽ち大聲を揚げ、「あゝ我れ再び主を見たり、また主我れに告げ給ふ、『汝水の中を過ぐる時は我れ共に居らん、河の中を過ぐる時は水汝の上に㊁溢ふれじ』、と」。かくて兩人は共に勇氣を出しけるに、夫れよりは死の敵も物の數ならず、河も次第に淺瀬となり、基督信者の足の立度も定まりしかば、やがて彼方に渡りてけり。

さて此の河の向ふなる岸邊には、兩個の輝やける人々再たび現はれて彼の兩人を待ち受けたり。されば兩人の河を出でし時、此の人人懇ろに之れを迎へて云へるやう、「我等は案内の天使にて、神の國の嗣子たるべき方々を案内せんため使はされたり」㊂。かくて兩人は導びかれて城門の方に進みたり。

げにや彼の都は最と高き峯の頂だきに建てることなるが、旅人等は各自彼の人々の腕に扶けられしかば、難なく此の峰をも登りたり、且つ亦川に入る時までは朽つべき衣を纏ひたりしが、之れを出づる時全く脱ぎ捨てゝ身輕となりしかば、都の基礎は最と高き雲井の上に在りしかども、さも輕やかに又速やかに彼方を指して登り行けり、行く行くも安らかに彼の河を渡りたることなど語り合ひて且つは喜こび、また斯く榮えある人々に連れ行かるゝを思ひて且つ慰さみたり。

㊀希伯來十二ノ二、十二ノ二、十三、㊁默示二ノ七、全ノ三、四、五、全二十二、全ノ五、全二十一、以賽亞六十ノ四、十五、十七、六、

さて彼の輝やける人々は兩人に向ひて、所の榮光を物語り、而かも其の榮光また其の麗はしさの到底も口には云ひ盡し難き由を述べ、猶ほ更に言葉を繼ぎて云へるやう、「あれこそ『天のエルサレム』なるシオンの山にて、千萬の天の使の在るところ、また成全うせられたる義人の靈魂の在る處』なれ。實に卿等は今しも神の樂園㊀に行かるるなり、彼處にては生命の樹をも見るべく、また永久に朽つること

なき其の實をも食ふべし。又之れに入らば白妙の衣を着せられ、また大君と共に日毎に往來し、且つ語りて世々限りなきに至るべし。まことに彼處にては、憂愁、病苦、苦痛、また死ぬることなど、凡そ下界の世に在りける者は、再と見ることもあらざるべし、『そは前の事すでに過ぎ去れば(ヤコブ、並びに其の他の預言者等が許に行かるゝなり、彼の人々こそ神之れを撰びて來らんとする禍害より救ひ、今は『平安に入り、各自直きを行なひて寐床に休む』者なれ」、と打ち語る。其時兩人は之れに向ひて、「さても彼の聖き處に行かば、我等如何にして宜しかるべき」、と問ふに、彼の人々又答ふるやう、「彼處にては卿等其の辛苦に代へて慰さめを受くべく、又凡ての憂愁に代へて喜悅を得べく、げにや卿等が播きたる者を刈り、道すがら大君の爲めに盡したる凡ての祈り、また涙、また患苦の實を收むべし。また彼れなる處にては卿等黄金の冠冕を着るべく、且つ聖にて在ます者と遠長に見ゆることを得べく、而かも『その眞の相を見るべきなり』。彼處にては又讃美と感謝の聲を以て斷えず主に仕ふべく、之れ世に在りし頃卿等の頻りに願ひて、而も其の肉の弱きにより爲し得ざりしことなり。また卿等の目は全能にて在ます者を見て悅こび、卿等の耳は其の朗らかなる御聲を聞きて喜こぶべし。また彼處にては卿等より前に行きたる友人等と、再び相見ることをも得べく、また卿等より後れて來らん人々をも迎へて共に喜こぶことを得るなるべし。彼處にては又卿等共に榮と權威をもて裝はれ、且つ相應しき備へを得て榮光の主と共に乘り出づべし。げにや雲間に猛の音を轟ろかせ風の翼に乘りて主の來り給はん時、卿等も共に從がふべく、又主が審判の座に居わり給はん時、卿等も必らず之れに從がふべし。天の使にもあれ人間にもあれ、凡そ邪惡を行なへる者どもに罪の言渡しを爲さん時、

(上)加拉太六ノ七、八、

(ヲ)約翰一書二、三ノ二、

(ヱ)帖撒羅前四ノ十一、十二、三ノ七、猶太書十四、十五、但似理七ノ九、十、哥林多前六ノ二、三、

（カ）黙示十九ノ九、

卿等も主と共に之れを罪すべし、そは彼等は皆な主の敵にして又卿等の敵なればなり。かくて又主が再び都に還へらるゝ時は、卿等も亦笛の音に伴れて共に歸へり行き、永遠に主と住ふべし」。

さて斯く語らひつゝ彼の城門に近づける頃、忽ち多くの天軍現はれて彼の兩人に出で遇ひたり、其時輝やける兩個の人々之れに向ひて、「此は世に在りし頃我が主を愛し、また主の聖き尊名の爲めに一切を捨てたる人々なり、されば主は我等を送りて迎へさせ給ふにより、伴なひて是處まで登り來り、猶ほ贖主に對面を得させて、親しく其の喜悅に入らせんと案内する處なり」、と云へば、天軍之れを聞きて忽ち大聲に叫けび云ふ、『羔の婚姻の筵に招かれたる者は幸福なり』と。折しも白く輝やける衣を着たる王の樂人等も亦夥多しく立ち現はれて之れを迎へ、調べ妙なる樂の音を最と聲高く吹き鳴らして、大空も爲めに震はん斗り、また其の樂の音につれて數多度び繰り返へし、げに能くこそ浮世を離れて來りつれと、皆な一齊に祝し呼ばゝる。

斯くて皆な四方より彼の兩人を取り圍み、或るは前に立ち、或は後へに伴なひ、或るは右に沿ひ、或るは左りに從がひ、（宛ながら雲の通路に彼の兩人を警護する如く）、猶ほしも絶えず調べ最と高き樂の音妙へに吹き鳴らして進みたり。其の光景の盛んにして賑はしかる、まことに天の民悉皆く降り迎ふるとも見えつべし。さて愈よ進むに連れて、音樂の調べ愈よ妙へに且つ繁く、而かも樂人等の顏色も其の手振りも皆な音樂の節と共に喜こばしげなるに、如何さま心より歡こび迎へらるゝ有樣も知られてけり。されば兩人は未だ都に入らざれども、見渡す限り天の使の充ち滿ちたると、妙へなる樂の調べを聞くことに依りて、其の身は早く其の中に在る心地せり。且つ是處よりは都も唯だ一と目に見え、諸々の鐘の響其の中に鳴り渡り

（目）默示二十二ノ十四、

て、自からを迎ふる者としも聞かる、別けても其の住宅の彼處に在るを思ひ、斯かる人々を友として末遠永に住はんと思ふ温かなる喜悅は、あはれ筆にも口にも盡し難き次第なるべし。やがて愈よ城門に達してけり。

さて愈よ城門に至り見れば、其の上に黄金の文字にて記されたる言葉あり。

『その衣を洗ひし者は幸福なり、
彼等は生命の樹の實を受くることを得、
また門より城に入ることを得べし』。

さる程に我れ夢の中に見けるに、輝やける人々彼の兩人に指圖して其の門を音なふべしと云ふ、されば兩人は云ひ含められたる通り之れを音なへば、直ちに應へする者ありて門の上より此方を眺めたり、之れ乃はちエノク、モーセ、またエリヤなど云ふ人々なり。其の時彼の案内の人々之れに向ひて、「此は我が大君に忠義を致さんとて、滅亡の城下より出で來れる旅人等なり」、と云ふ。それに連れて兩人は先に受けたる通行劵の卷物を取り出だせば、卷物はやがて王の前に持ち行かれ、王は亦之れを見給ひて、「此の者共は那處に在りや」、と問はせ給ふ。「御門の外に扣ゆるなり」、と聞こえ上ぐれば、王は更に言葉を繼がせ給ひて、「實にや、『忠信を守る義しき國民を容れんため』」彼の城門を開けよかし」、と命じたり。

（文）以賽亞二十六ノ二、

さて我れ夢の中に見けるに、彼の兩人は愈よ進みて門の中に入りけるが、視よ、其の入ると齊しく兩人の貌忽ち變はり、其の着たる衣は黄金の如く輝やきたり。また縱琴と冠冕とを持てる者も之れを迎ふ、げに縱琴は之れを讃めんため、また冠冕は榮光の表號なりけるなり。其時我れ又夢の中に聞きてあれば、諸々の鐘再び都の中に響き渡りて喜悅を傳へ、また聲ありて呼ばゝり云ふ、

『汝の主の歡樂に入れよ』と。

我れ又聞けば、彼の兩人も共々高く聲を揚げて歌ひ云ふ、

『願はくは讃美と、尊敬と、榮光と、權力と、

寶位に坐する者及び羔の上に歸して、

世々窮り無からんことを』と。

さて城門今しも開らけて彼の兩人を入れんとする時、我れ其の後ろ影を見送りて門の内を窺がひしに、まことや都は日輪の如く輝やき渡り、また其の大路小路は悉皆く黄金を鋪き渡し、其の上を往來ふ者皆な其の頭に冠冕を戴だき、其の手には勝利の目表なる棕梠の葉を持ち、また黄金の縱琴を取りて讃美の歌を歌ひたり。

且つ亦其の中には翼ある者數多ありて、互ひに呼び交はしつゝ間斷なく云ふ、『聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、我が主』と。

さて程なく門は閉ぢられしが、我れ此の有樣を見たる時、あはれ我が身も彼の中に在らばやと欲ひたり。

さて我れつくゝと斯かる事どもを打ち眺めて在りたりしが、不圖後ろの方を振り返へりて、彼の愚昧の何時しか河岸に來れるを見たり。去かも彼の者は頓て之れを渡りて、前の二人に比ぶれば左程の難儀も無かりしやうなり。實は偶ま是處に空頼と云へる船頭ありて其の小船を頼りに渡りしことなり、かくて前に見つる兩人の如く之れも城門さして彼の山路を登り行けり、されど誰れありて勵ましの迎ふる者も無く、獨り淋しく進みたり。さて愈よ城門に達しける時、彼の者仰ぎて門の上なる文字を讀み、直ちに入ることを得らるべしと想ひ測りて打ち叩きたり。されど門の頂だきなる人々之れを見降ろして、「汝は那處より來り、また何を望むぞや」、と尋ぬるに、彼の者平氣に答ふるやう、「我身は大君の前にて飲食せしことあり、また大君も我が街衢にて教へを說かれしことあり」。人々は之れを聞きて、

然らば大君に見せ參らせんため、其の卷物を出すべしと云ふに、彼の者其の懐中を探りは爲つれど元より在るべき筈も無し。其時彼の人々之れに向ひ、「さては一どつも有たざるか」と云ひしが、彼の男最早や一と言だに答へを得爲ざりければ、やがて此の由を王の許に告げ進せしが、王は元より振り向きも爲給はず、唯だ曩に基督信者と有望を都に案内せし兩人の輝やける者を招き、彼の愚味を捕らへ其手足を縛りて曳き立てよと命じたり。されば直ちに之を捕らへ、虚空迢に提げ行きしが、さても曩に山の傍はらにて見たりける入口の處に至り、彼を其中に投げ入れたり。其時我れ之を見て、さりとては彼の滅亡の城下よりと齊しく、天の城門よりも直に地獄に通ふ路あることを悟りたり。かくて我が夢名殘なく覺めてけり。

天路歴程畢

天路歴程譯文自跋

バンヤンの書「ピルグリムス、プログレス」は實に天下の名著、千載稀れに其類を見る者なり。聖書の在る處此の書必らず在り、聖書の翻譯せらるゝ處此の書亦伴なふて其の方言に上り來る。而かも曩きに有名なる某氏が之れを評して、「彼れが文章は則はち東陂の所謂る、絢爛極而平淡なる者、字々句々金石ならざるは無し」、と云へる如く、之れを翻譯するは、事頗ぶる至難に屬す。然りと雖ども我が國既に其の二つを得たり。一は中村敬宇先生を後楯として佐藤喜峯氏の手に完うせられ、一は日本人某氏を助手としてホワイト氏の勞に成れり。前者は我が初代の信徒を益したること甚だ多かるべく、後者は現に六版を重ねて廣く江湖に迎へらる。其の功績兩々共に長

く忘るべきに非ざるなり。

余曾てアブラハム、リンコルンの傳を讀み、此の偉人が終生「ビルグリムス、プログレス」を愛讀したりと聞きて心爲めに動く。其後余が洗禮の師、植村正久先生より亦バンヤンが事に關して敎を蒙むること有るに及び、愈よバンヤンと其著書に對して敬慕の念を加はへ、終に余も亦最も之れを愛讀する者の一人となれり。爾來幾度か之れを讀み、讀む每に發憤以て自から省みる處多く、從つて其の益せらるゝ處を分たんとするの情、亦轉た切なる者久しかりき。頃日偶ま好機會を得て此の飜譯に着手し、焦心苦慮、頻りに天助を仰ぎて漸やく之れを成すを得たり。余豈に妄りに僭して之れを前二者に勝れりと云はんや、亦自から不肖敢て其の任を全うせざるを耻ざらんや。然れども人各々其の見る處に從つて發明あり、而して余が此の事業に對しては、確かに前二者に劣らざる熱心を以てし、殊に著者に對しては、滿腹僞り無き同情を有し、其の一字一句にも、別して其の人名地名にも悃誠に忠實を盡したる、是れ余が諒なり。

譯者識

7/5/41

明治三十七年十二月十六日印刷
明治三十七年十二月拾九日發行

著作權所有

譯者　高知縣高知市中島町六拾番屋敷　池亨吉

發行者　東京市赤坂區氷川町五番地　ジョージ、ブレスウエート

印刷人　横濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉

印刷所　横濱市山下町八十一番地　福音印刷合資會社

發行所　東京市麹町區有樂町二丁目三番地　基督教書類會社

33

98
55

98
55

101235-001-1

98-55

天路歴程

ヂョン・バンヤン／著

M37, 42
DBY-0562